

■平成 27 年度 第 3 回 静岡市歴史文化施設建設検討委員会

- 1 日時 平成27年8月4日（火）15時00分から
- 2 会場 静岡市役所静岡庁舎 新館17階 171・172会議室
- 3 出席者 [委員] 熱川裕、今村直樹、櫻井典子、杉澤恒、杉山朋子、谷直樹、
中村羊一郎、松川満嘉、望月敬剛、森田みか
[事務局] 観光交流文化局長、観光交流文化局次長
歴史文化課：丸岡課長、岩田課長補佐、花村副主幹、小泉主査、
稲森主査
- 4 傍聴者 2名
- 5 議事 (1) 諸室構成について
(2) その他
- 6 報告 (1) 管理運営形態について
- 7 会議内容
(1) 開会
(2) 議事

○委員長：今日は3回目になりまして、極めて具体的なかたちで、歴史文化施設の内容をご検討いただくこととなります。よろしくお願いいたします。

○事務局：前回までの検討事項につきまして、説明させていただきたいと思います。（資料「歴史文化施設建設基本計画策定にかかる課題整理について」説明。）

○委員長：ただ今の件で、何かぜひ補足しておきたいことはございますか。

○谷：先ほどのお話では、テーマ展示と通史展示の中で、通史展示がなんとなく家康公を中心とした通史展示だというご説明でした。私が前回申し上げたのは、通史展示は、小学生とかを対象にしたいいわゆる通史と呼ばれるものが良くて、家康公というのはテーマ展示

の一つです。大小の捉え方はあると思うのですが、通史展示を家康公でやるとかなり陳腐なものになるような気がします。それは歴史の方にいろいろご意見をお伺いしたいと思いますが、今のまとめはちょっと違うなと思いました。

○委員長：ただ今のご意見については、留意事項ということで、今後具体的な内容を立案していく過程で、しっかり受け止めておきたいと思います。

① 諸室構成について

○委員長：次に、本日の具体的なテーマに入りたいと思います。一応、大筋としては家康公をメインとすることでご了解は得られています。そうした前提に立って、きょうお配りいたしました資料はいろいろな内容が盛り込まれているので、少し順序立てて整理をしていきたいと思います。

資料の 2 で色分けがしてありますので、その色分けを一つの単位といたしまして、事務局のほうからご説明をいただけたらと思います。まず、博物館機能の中心となる展示エリア、収蔵エリアについてお願いいたします。

○事務局：展示エリア、収蔵エリアについて説明をさせていただきます。

まず諸室構成全体の考え方ですが、この施設の特徴は、来訪者が集うビジターセンターと、市民活動を支援する市民交流エリアを設けることで、展示エリアを核に双方のさまざまなかわり方が生まれ、静岡市の歴史文化を広く市内外へ発信することができることであり、これまでの検討委員会での協議内容や、類似施設の状況などから、施設を次の 5 つのエリアに分け、それぞれ色を変えて示しております。

1 つ目として、博物館資料を収集保存するための紫色に区分けした収蔵エリア。2 つ目として、博物館機能の中心となる緑色に区分けした展示エリア。3 つ目として、今まで議論してきました静岡市への来訪者が集うオレンジ色のビジターセンターエリア。それら 3 つに加え、市民活動を支援する青色の市民交流エリアと、灰色の管理運営エリア、合わせて 5 つのエリアで構成しております。

各エリアの面積につきましては、まず博物館機能に必須となる収蔵エリア、展示エリアの面積を算定し、必要不可欠となるスペースを確保しました。

次に第 1 回、第 2 回の委員会の中で委員の皆さまからいただいた意見を踏まえ、市民交流エリアとビジターセンターエリアの積算を行いました。当初、事務局のほうで全体面積を積算したところ、6100 平方メートルになりましたが、徒歩圏内に市の施設が幾つかある

ことから、周辺施設も活用した活動展開や、各部屋を個別に設けるのではなく一体的に使用できるような構造にすることにより、諸室を整理統合し、全体の面積を修正しました。

その結果、全体で 5600 平方メートルとなりましたが、そのうちレストラン、カフェ、展望にかかる 600 平方メートルが複合化する施設にも必要になるのではないかとということ、別棟として整理し、全体を 5000 平方メートルとしております。

(以下、資料 2 に基づき、各エリアについて説明。)

○委員長：資料 2 の紫とグリーンの部分について、皆さま方のご意見をいただきます。

○今村：一般収蔵庫の 800 平方メートルがありまして、委員会の意見としては、県立では 2000 平方メートルが目安となっていて、それよりも少ないかたちになっています。ここには浅間神社所蔵資料を入れるということで 800 平方メートルとご説明いただいたのですが、この 800 で十分なのか、少し気になるところです。この 800 とした理由をご説明いただいてもよろしいでしょうか。

○事務局：まず、この歴史文化施設は、公開承認施設の条件を満たすつくりにしななければならないと考えております。公開承認施設の目安として、展示面積の 40 から 50%程度の収蔵庫が必要だということがありまして、800 平方メートルを算定したものです。

○今村：少し手狭かなと思いました。前回の委員会では、物が大事だというお話もありましたけれど、博物館資料はどんどん増えていくものだと思います。地域資料なども、今は収蔵スペースがどんどんなくなって、散逸している資料が非常に多いです。

さらには、これは資料レスキューの問題ともかかわってくるのですけれども、もし災害が起こった際に、資料をどこで一時的に保管するかも、今後、静岡では課題となってくると思います。その際に、この収蔵庫はもう少し大きい必要があるのではないかと考えました。

○事務局：これから後、博物館が出来上がっていくと、収蔵品が増えていくことは承知しております。現在も、資料調査を進めていくと、博物館ができたらずぐにでも寄贈したいのでその手続きに入ってくれとおっしゃるような所蔵者の方もいます。

ただし、あの場所で面積が非常に限られていて、収蔵面積も際限なく大きくしていくことがなかなか難しい中で、旧由比町の役場を収蔵庫に改造して使っているところと、平成 16 年につくりました埋蔵文化財の保管施設がございます。そういったところに古文書類などで密に管理が必要なものなどを保管していますので、幾つかある既存の収蔵施設等と役割分担をしながら、この施設の中に収蔵すべきものはどういうものなのかという分けを

きっちりしまして、一般収蔵庫、特別収蔵庫に収蔵していくのがいいのかなと事務局としては考えているところです。だから、これから収蔵すべき品物がたくさん出てきて、何でもかんでもここに収蔵していくということは考えていません。

○谷：今の事務局のご意見に反対するわけではないのですが、そういう考えだと、博物館本来の機能をどう考えているのかというところに、私は疑問を持たざるを得ないです。

800 平方メートルと 100 平方メートルで想定しておられますけれども、これから 20 年、30 年すれば、今の時代の資料も博物館資料になってくる時代が出てくるわけです。そうすると、この面積を可能なかぎりたくさん取っておかないと、新しいものは入れられないぐらい満杯になってしまいます。

どこの博物館も、開館したらすぐ満杯になるのです。建て替えなどをしますと、ほとんど新しいものは入れられないぐらい満杯になってしまいますので、1 つやってほしいのは、県立クラスのものその博物館が一体どの程度の収蔵庫を持っているのかという資料を添付していただくことです。

それからもう 1 つは、市が持っておられる既存の収蔵施設がどのぐらいの面積があるかです。例えば考古の発掘資料を収蔵しているところはどこでも、つくったらほぼ満杯になっているような状況があるので、面積だけではなくて、収容率がどの程度あるとか、そういうことを踏まえてやる必要があります。

そもそも考古資料を入れるのかどうかです。この博物館は登呂遺跡の時代とか、弥生時代、あるいはもう少し古い時代のものは資料として扱わないのかどうかとか、そのへんの整理がちょっとよく分からないので、そのへんのこともきちんと言ってください。

それから 3 つ目は、この収蔵庫だけではないのですが、この建物は一体何階ぐらいの建物なのかがよく分かりません。私が以前に別の博物館をやったときに、東日本大震災の後に津波の高さが見直されて、結局、1 階には全く展示ができないことになりました。つまり、収蔵庫だけではなく、展示室も 1 階に置くと、企画展で借りたものが冠水するかもしれないということで、1 階の展示が全部駄目になって、コンペをして見直した例がありました。

ここの場合はよく分からないのですが、想定される津波の高さによっては、展示室を上層階に持っていかざるを得ないことがあるかもしれません。上層階に持っていくと、耐震免震をしなければいけないとかいろいろあるので、一体どういうデータで動いているのか

を教えてくださいたいと思います。

○事務局：既存の施設の面積等につきましては、資料をお送りさせていただくかたちで、一覧を出させていただきたいと思います。

考古資料につきましては、登呂遺跡では基本的に弥生時代を中心にやっています。これまで登呂博物館が中心になって市内の発掘調査などをやってきたこともありまして、登呂遺跡以外の静岡市内の遺物なども登呂博物館に収蔵されていましたが、基本的には登呂遺跡だけのものにしていきたいという考えを持っています。それ以外の埋蔵文化財の資料は、埋蔵文化財センターに保管しています。静岡市と清水市が合併し、さらに由比町と蒲原町が合併しまして、考古資料はかなりあちこちにあったのですけれども、埋蔵文化財センターを中心に、由比の庁舎の収蔵庫を使っているのが現状です。

もう 1 つの津波ですが、建設する場所の標高は 21 メートルぐらいですので、津波の影響は考えなくてもいい場所です。当初は 4 階建ての建物を想定しておりましたが、ほかの施設との複合化という話もある中で、今は少し想定が変わりつつあります。

○谷：由比の旧庁舎は、例えば 24 時間空調とか、そういうことは全部できているわけですか。

○事務局：そういう設備はありません。

○谷：考古学のご専門の方がおられるかもしれませんけれども、最近だと近世考古学とか、ひょっとしたら近代考古学が出てくるかもしれません。ここもそういうことを想定しなければいけないと思うのですが、このへんは事務局で整理していただけたらと思います。

○松川：今、他館との比較ということが出たのですけれども、島田にも立派な博物館がありますし、藤枝にも、焼津にも、富士にもあります。たぶん、それぞれ苦労されていると思うのです。近隣の市町村の博物館との比較の視点で出していただけると分かりやすいと思います。

例えば、企画展示で文化庁の「発掘された日本列島」を平成 24 年度に、藤枝の博物館でやりました。登呂博物館でも、平成 23 年度にやったのですけれども、企画展示室は本当に小さなものですから大変苦労しました。藤枝の博物館はちゃんとできたのです。それは、まさに博物館にしか回ってきませんから、市の美術館とかではできません。

最低限「発掘された日本列島」ができるスペースが欲しいというようなことで、具体物として比較をされたほうが、われわれとしては分かりやすいと思います。

○委員長：私の個人的な意見を言えば、周辺の市町村との比較ではなくて、政令市ですか

ら、そのこのところを念頭に置いた構想をぜひお考えいただきたいと思います。

それでは、次に市民交流エリアについてのご説明を、事務局からお願いしたいと思います。

○事務局：市民交流エリアにつきまして、説明させていただきます。

近年の博物館では、展示をただ見るだけではなく、利用者が主体的に調査研究や、展示、イベントの企画などの博物館活動にかかわり、自らが学び、考え、発見する機会の提供が求められており、さまざまな博物館で市民の自己学習や活動を支援する場を設けております。

静岡市では、多くの市民が主体的となり多様な博物館活動を展開していくことを目的として、市民が自ら学習を行う場、互いに情報交換を行う場、いわば歴史好きのたまり場としての学習支援室、また、市民活動を支援する市民活動室、ボランティアスタッフの活動拠点となるボランティア室を設け、ここを市民交流エリアと定義したいと考えています。

(以下、資料 2 に基づき、市民交流エリアについて説明。)

○委員長：ただ今、それぞれの部屋の面積等を含めた活用の内容についてのご説明をいただきました。先ほどの展示エリアにおいて、市民団体による研究活動の成果、発表といったものも行われるのではないかと思います。博物館と、ボランティア、市民団体との連携や協働作業といった観点も含めまして、ご意見、あるいはご質問等がありましたらお願いしたいと思います。

○松川：たくさんの民間の歴史研究団体があると思いますが、こういう団体を事務局は全部掌握しているのですか。それと、どういふかたちでかかわることを考えているのかを聞きたいと思います。

○事務局：市民団体につきましては、ある程度把握しています。

そういう団体が、博物館を拠点にしていろいろな活動をしていくことで、博物館資料の収集にもなったり、それらを展示で活用したりすれば、市民団体の研究成果の発表の場にもなるということで、市民団体がやりたいこと、活動したいことを、博物館を拠点にして活動していってもらえるような体制をつくっていきたいと考えています。

○谷：これの一番の問題は、ここに書いてある市民交流エリアと博物館の展示エリアが全くつながっていないことです。これがないと、何のために市民交流エリアがあるのかが分かりません。チャート図はものすごく大事で、関連するところをどうつなげるか、再検討していただきたいと思います。

○委員長：それは、建物の中における配置という意味ですか。それとも、考え方という意味ですか。

○谷：考え方です。考え方がつながっていないと、たぶん設計する側はつながらない設計になると思います。展示場とか、場合によっては市民ボランティアが資料の整理までやるかもしれません。そこのところはよく考えておかないと、このままでは、たぶん一番遠い対極にあるので、設計をする側がこれをもって設計すると、たぶん建物の中でつながっていかないと思います。

○委員長：そうすると、図の描き方の修正ということで検討していただきたいと思います。

○今村：市民活動室の 100 平方メートルは十分か、少し疑問に思いました。活動室が 1 部屋で、1 団体が使うから埋まってしまっているというのはまずいと思います。パーティションで仕切ってもいいとは思っているので、複数の団体が同時に使えるぐらいのスペースがあればいいのかなというのが 1 点です。

もう 1 つ、交流エリアかどこかに資料閲覧室が必要になってくると思います。資料の公開は施設として重要になりますので、どこかに閲覧室を入れるべきではないかということで、提起させていただきます。

○望月：学習支援室の 100 平方メートルは非常に狭いという思いを持っています。48 席可能ということなのですが、小中学生がここに社会見学や学習に来た場合、大人数の学校ですと 1 学年 200 名近くいる学校もあります。中に入れば、グループ学習とか、駿府城公園など、ほかのところも含めた活動にはなろうかと思うのですが、いつか集まる場所としては、200 名程度が入る規模で、パーティションで区切れるようなかたちにしていただくのがいいと思っています。

また、小中学生が見学等に来るときには、単体でここに来るという考え方はないと思います。いろいろなところの組み合わせの中で学習をしていくと思います。そのときに 1 日かけて来ますので、昼食スペースが課題になると思います。

晴れた日はいいのですが、雨の日は駿府城公園にもそれだけ収容して昼食を取る場所がありません。自分の学校は城内中学校ですが、葵小学校など、学校によっては事前に連絡が来て、雨の日は体育館を貸してほしいとか、会議室を貸してほしいという要望があって、本当にそういう学校が来ます。そういうことも含めて、学習支援室は多機能に使えるような広さを取っていただくと嬉しいです。

○委員長：今のことについて、何かできることはありますか。資料を見ますと、講座等の

開催は、アイセル 21 や、ペガサートなどの周辺施設を活用し、エリア全体を使うアイデアが示されています。こういうことで果たして実現可能かどうかという問題も含めて、今の意見と合わせて、お考えを聞かせていただければと思います。

○事務局：小学校の見学等に対して昼食場所等々が必要になるということで、この施設では、全ての部屋をいつでも使っている状況をつくっていかうという中で、この図で示しました青く点線で囲った部分、市民交流エリアの部分からビジターセンターエリアのところにかけて、できるだけ一体で使えるような空間配置を整えていきたいというところが 1 点です。その中で、大勢の人数に対応していかうというのが 1 つ目です。

もう 1 つは、できるだけ複数の団体に対応するというので、市民活動室等も含めて、パーティションで仕切るとか、部屋の大きさを変えられるようなかたちで対応することで、いろいろな団体の受け入れ、複数の学校の受け入れ等、できるだけ大勢の人数を効率よく受け入れていきたいということで、このような配置を考えています。

○委員長：質問はもっと具体的な問いかけがあったと思います。例えば、200 人レベルの団体をどう扱うかですが、何かお考えはありますか。

○事務局：あそこの一等地では、限りある面積を有効的に活用するしかないものですから、周辺の施設を活用するというのが 1 つの考え方になります。もう 1 つは、後でまたビジターセンター機能のご説明をさせていただきますが、エントランスの部分を昼食会場として使用していただくことで、多目的に利用できることを検討していきたいと考えています。

面積がない中でいろいろな生み出し方をしているものですから、皆さまの意見をいただきまして、このへんにつきましてももう一度検討し直したいと思っております。

○森田：青い点線で囲ってあるところは、いろいろな使い回しができるようになる想定ですが、例えば学習支援室も、固定の机や椅子があるのではなくて、それも取り払うことができるかたちですか。例えば、市民活動室を使う人が多い場合には、学習支援室のスペースをエントランスまで出っ張って使うし、子どもたちが多いときには、市民活動室や学習支援室をよけて、そこまで人が入る感じになるのですね。そうすると、そこで使う机、椅子とかを収納するスペースが必要になってきます。

部屋を区切るときには、パーティションでは陳腐な感じで厳しいと思います。例えばグランシップの企画展示室のイメージの壁だとすると、壁を収納するスペースが必要になるので、具体的に配置していかないと実際に入るかどうか分からないとか、机、椅子を出そうと思ったときに出ないとか、さまざまな問題が出そうな気がして、ちょっと心配にな

りました。

エントランスまで含めて子どもたちがご飯を食べているところに、観光客が来たらどう思うだろうか、具体的なケースで詰めていったほうが間違いないという気がいたします。

○事務局：今ありましたご意見等をもう一度踏まえまして、再検討させていただこうと思っております。

そうした中で、真ん中の緑の部分が有料ゾーンになり、左のブルーの部分とオレンジの部分が、無料部分になると考えておりました、この無料をどのように活用するのかという中で、もう一度検討させていただきたいと思います。

○委員長：いわゆるエントランス部分も含めた大人数への対応が 1 つの課題としてあると思いますが、これは、事務局のほうで、もう少し具体的なアイデアを出していただければと思います。

○櫻井：そもそもこれは 1 階にビジターセンター、2 階に展示エリア、3 階に収納エリアと、フロアが全部別になるのでしょうか。

○事務局：この建物は複合施設を前提に考えておりますので、階数につきまして、この部分を何階に分けるといふところについては、施設等の兼ね合いの中で考えていくことになりますので、これが 1 階、2 階、3 階というものは出来上がっていません。できれば次回の会議で、そのへんをお示しできればいいなと考えております。

○櫻井：そうすると、例えば、エントランスから無料のガイダンス展示を見て、そのまま博物館に入っていくようなことはあまり想定していなくて、別のものになるのでしょうか。

○事務局：基本的にこの全部をワンフロアにすることも可能だとは思いますが、先ほど櫻井委員が言われたとおり 1 階、2 階、3 階に分けることも可能だと思います。そういうところも踏まえて、これから検討していきたいと考えています。

○委員長：建物の何階にあるかについては、先ほど谷委員からもご意見があったと思いますが、前回の委員会で、展示への入り口は 1 階から行けるようにしないと絶対に駄目だというご意見もありました。建物の高さ、構造については、そうした方向が満たされるようなかたちで、今後もう少し詰めなくてはいけないと思っております。

ボランティア室が 50 平方メートルありますが、ここには着替えのロッカーなども全部収納するという前提ですか。

○事務局：はい、そうです。着替えもそうですし、荷物を置くとか、そういうことを想定しております。

○委員長：谷委員のところ、実際にいろいろなことがあると思うのですが、いかがでしょうか。

○谷：たぶん私のところと事情が違うと思うのですが、ボランティアの活動形態をもう少し追跡しておかないと、ロッカーはなくてもできるわけですから。ボランティアのイメージで、もう少しよその館とかを取材していただいたほうがいいと思います。

先ほど森田さんからもお話がありましたけれども、小学生が 1 グループ何人ぐらい来るのかです。小学校の 2 クラスとか、3 クラスが来たとしても、100 人ぐらい来ます。2 つの学校や 3 つの学校がバッティングをすることもあるわけです。そのへんのシミュレーションで、静岡市内とは限らないかもしれませんが、静岡市内にどれぐらいの学校があって、1 回当たりどれぐらいの人数が来るかによっては、48 席しかないとしても対応できないのではないかと思います。

子どもたちは、雨の日が一番困るのです。「雨の日に食事ができる空間を取っておいてくれたら連れて行く」と先生方はおっしゃいます。晴れの日には外で食べられます。ホールの一画で、普通のお客さんが入ってくる横で食べているのは、あまりかっこいいものではないと思いますから、仕切らざるを得ないと思います。

それから、フレキシビリティにやるのはいいのだけれど、結局中途半端で、職員の方が右往左往します。つまり、パネルを立てたり、外したりするのに時間がかかってしまうので、むしろ小さな会議室を幾つかつくるほうがいいと思います。

ここは無料ゾーンと書いてありますけれども、一般市民は全部無料なのですか。貸室はしないのですか。開館したら、あそこはもったいないから貸室にしたほうがいいというふうにしたほうが楽だと思います。無料にすると、一体どういうふうにして無料の相手を探すのか、いつから募集して、早い者勝ちなのか、抽選なのか、結構難しいところがありますので、有料にしておいて、小学校とかは無料にするとか、そういう減免措置を取ったほうが、実際の運営は楽なのではないかと思います。

何度も申しますけれども、今の学習支援室とか、市民活動室も、結局は展示エリアとうまくつながる動線がないと、この問題は分離しているような感じがします。それから、先ほど今村委員からお話があった、右の一番下の書庫も、私は公開の対象になるのかなと思っていたのです。つまり、博物館に、歴史関係の資料とかいろいろな本が入りますので、それを学芸員だけで使うのか、市民の方々にも公開するのかによって書庫の場所が変わります。書庫がこんなに一番右端だと、とても市民は近づけないので、お考えいただけたらと

どうかと思います。

○委員長：博物館ではよく、いろいろな講座を開いたり外部からお招きをして勉強する講座室があるのですが、これにはその講座室がありません。そのへんは、外部の施設を使う前提なのでしょうか。

○事務局：当初、事務局としては講座室も用意させていただこうと思ったのですが、駿府城エリア全体を考えたときに、アイセルもあれば、ペガサートもありますので、そういうところの活用も考えていくべきではないかということで、現時点ではそうさせていただいています。

○谷：委員会意見として、「企画展示室は 500 から 600 あれば十分」と書いてあるのですが、十分と申し上げたつもりはありません。これを書かれると、600 で十分だから、場合によっては 500 でもいいとか、だんだん減ってくると、十分ではないところが出てきます。よその県立クラスとか、政令指定都市立の企画展示室の面積をもうちょっと調べていただいたほうがいいと思います。

それからもう 1 つは燻蒸室ですが、ここで燻蒸するご予定なのですか。燻蒸はどのような薬を使われるのですか。

○事務局：市の美術館には燻蒸室がないために、市内の仏像を集めて展示をする仏像展の企画をつくったときに、無理だねという話がありまして、歴史文化施設のほうにはぜひ燻蒸室をつくってくれという話の中で設けています。具体的に何の薬を使って、どういう燻蒸室にするかまでは全く練られていない状況です。

○谷：燻蒸の薬は、一歩間違えば毒薬です。だけど、結局は活性炭に吸着して、最後は大気に放出するわけです。だから、このあたりでそれがいいのかどうかとか、そこから議論しないと、実際に燻蒸室ができても稼働できないこともあります。逆に、テントみたいなものを中に入れて、そのテントの中に物を入れてやるというやり方もあります。そうになると、いろいろな機械は業者が持ってくることになります。

実際につくっても稼働できないこともあり得ますので、そのところをもう少し研究されて、何を採用するのか、最新の文化庁あたりのご推薦は何なのかを考慮しておいたほうがいいと思います。県立の美術館には燻蒸室はないのですか。

○事務局：県の美術館については、確認していません。

○委員長：具体的な運営の内容についてもご意見が出ております。事務局としては、いずれまた、ご質問を総合的に考えた新しいアイデアを再編成していただけたらと思います。

取りあえず次のほうに移りまして、何かありましたら、また改めてということにしたいと思います。

次に、ビジターセンターについてです。いわゆる展望台とか、レストラン等は別枠で考えるという前提がございますが、オレンジの部分についての説明をお願いします。

○事務局：オレンジの部分、ビジターセンターエリアにつきまして説明いたします。説明内容は、資料の左側に記載してありますが、ここではまず、委員の皆さまから具体的な案として出てきたレストラン、カフェ、展望を考えました。レストランは、団体客も利用できる程度とし 300 平方メートル、カフェはゆったりしたスペースを確保し 200 平方メートル、また、展望のスペースも設けていますが、これはレストランやカフェを展望できる場所に設置することも考えております。

これらを合わせて 600 平方メートルになりますが、これらの施設は民間に運営を委ねたほうが利用しやすいものとなると判断し、また、複合化する他の施設にも必要となると考えられるため、それぞれの施設の利用者の共有施設としないと考えており、全体面積から外しております。

また、ミュージアムショップや、トイレ、授乳室などは、歴史文化施設に必須なものとして組み入れました。エントランスは、施設の入り口となるところで、入場の受付や、観光情報コーナーの設置を考えています。

体験広場、ガイダンス展示などのスペースですが、ここがビジターセンターの核となる部分と考えています。なお、このスペースとエントランスは一体的に使用できるような構造を考えています。また、市民活動室や学習支援室と一体的に活用することも考えております。

○委員長：今の説明で、エントランスと体験ひろばのところ、枠は別になっていますが、広い空間にはできる前提なのですね。

○事務局：はい。

○杉澤：ビジターセンターは何が主体であろうかというところが、まず第一だと思います。それと、来館者のターゲットをどこに向けるかです。この 2 つが大事だと思っております。来館者でいえば、大別しますと、旅行を中心とした団体客と、個人客、インバウンドの 3 種類ぐらいに分かれるかなと思っております。

ただ、インバウンド客につきましては、静岡空港は爆発的に増えておりますものの、現時点で静岡は残念ながら通過点にしかなくなっているということを考えますと、ここはプラ

スアルファとして考えざるを得ないだろうというところです。

団体旅行は、主に教育関係になると思いますが、少子化の影響で先細りしていきます。ただし、安定的なお客さんとしてみることはできると思っております。また、団体客につきましても、他の博物館のデータを調べてみたのですが、シェアがあまり大きくないところも問題かなと思います。ツアーを組むという前提に立ったとしても、ここだけで集客機能を考えるのは厳しいと思います。

最後に個人客ですけれども、こちらは、松川委員のほうからもありましたけれども、歴史に熱い方、教育熱心なファミリー層が見込まれます。熱い方がいらっしゃるの分かりますが、全体の人口から考えると、パイはそれほど大きくないと思います。それを近隣だけで集めるのは非常に難しいので、首都圏、中京圏まで含んだ集客活動が必要でしょう。そうしないと、個人客もちょっと厳しいのではないかと考えます。

まとめますと、団体客を安定客として確保しつつ、首都圏、中京圏までにらんだ個人客をいかに確保していくかが大事だと考えています。ここで、今までも再々議論になりましたが、静岡市をどう見せていくのが非常に大事になります。

従来の体験型の博物館は、どうも苦戦を強いられています。個人的な案の 1 つとしましては、例えば静岡市では大道芸に取り組んでいますので、そういったものが常に見られるような施設です。これを家康さんとどうつなげるかというところが出てきますが、イベント性が高いものも 1 つの考えになると思っております。

○杉山:全体を見せてもらって、いろいろやっていたら市民交流エリアが狭くなってしまったとか、エントランスも、残った場所のここでもいいかみたいな気持ちの現れがここに出ていて、苦しいところもあるかなと思って聞かせてもらいました。

今、杉澤さんがおっしゃったように、現実問題、現状で 50 万人の集客目標を考えるのはつらい感じがしています。先週末、当社が主催でかわった「ももクロ」のコンサートには 2 日間、首都圏から 4 万人ずつ来るのです。例えば、そういうことをするとか、複合施設にもっと期待をすることが必要でしょう。複合施設でホテルみたいなものがあれば、そこに役割分担を任せてしまうと、共存していく方法がないのかなと感じました。

今、チームラボというデジタルテクノロジーを使った体験型のイベントを沼津でやっています。博物館は今の時代のものを取り入れていくことも必要なもので、それをどこに入れるか、ここでやれないのなら複合施設に期待をしたほうがいいのかとか、いろいろ考えながら、今のままだと 50 万人の集客はきついだらうなというのが自分の感想です。

○熱川：今、杉山さんからホテルの話が出たのですが、別枠になっているものは、市の予算がつかないと思います。それでどうするかと言ったら、前にあそこの周辺をマンションにするとか、ホテルにするという話を業者さんとしたことがあって、実に魅力的な場所だという話でした。それはちょっといい考えではないかと思います。

インバウンドの話も出ていましたけれども、あそこに泊まれるのだったらというようなインバウンドのお客さんも出てくると思います。実際に、この周辺には、中島屋とか、駅前のところはかなり団体のインバウンドのお客さんが増えてきたのです。せっかく泊まるのだったらここがいいかなと思います。ただ、駅前のシティーホテルみたいなものと競合するものですから、コンベンション関係の施設を増やすと静岡のキャパとしては厳しくなってしまうものですから、そういうものではない、ちょっと高級なビジネスホテル的な感じで、なおかつレストランとか、カフェとか、そういうものが全部備わっているような感じにしたらいいのではないかと思います。

周りの施設を使ってイベントをやると言ったのだけれども、にぎわいの元をつくるのであれば、この施設を中心にやったほうがいいのではないかと思います。この間、イベントをいろいろ打つ有名なデパートの視察に行ってきたのですが、お金の掛からないイベントを年間 800 ぐらいやっているのです。デパートの人とか、面白いお客さんをつかまえてきて、数人から数十人のイベントを毎日、しかも幾つもやっているのです。それがまたデパートのお客さんにもなる感じです。習いに来た人が先生になってどんどん拡大していくことで全国的に有名なデパートです。そういうことを考えると、中でやったほうがいいのではないかと思います。市民活動室、学習支援室、使えるところでいろいろやってみればいいのではないかと思います。

先ほど雨の日の対策の話が出ていましたけれども、こどもクリエイティブタウンとか、科学館などもそうなのですが、子どもの場合は椅子と机は必要がなくて、先生方もよくおっしゃっていますけれども、じゅうたん敷きのところに座って遊ぶ感じで食べるところがあるので、結構たくさん入るのです。前の施設を参考にしてみたら分かると思います。

○杉山：ちょっと外れてしまうかもしれないのですが、1000 人規模のスタンディングライブハウスの施設をどこかにつくれないかという話があります。今あるものを探すと、必ず柱が入ってしまうので、柱がない施設がどこかにないかという話があります。それをすぐつくるといわけではないのですが、そのぐらい博物館と違うところからの発想があってもいいのではないかと、勝手に思っています。

○委員長：スタンディングライブハウスは、みんなでわいわいやるものですか。

○杉山：そうです。市民文化会館が 2000 人規模で改装していくので、2000 人規模ではなくて、1000 人規模です。「ももクロ」のコンサートを見ながら、この人たちがみんな来てくれたら集まるなと勝手に思って、それとは別にライブハウスの話があったりしますので、直結ではないのですが、発想を転換していくときにはいいかなと思って発言させていただきました。

○森田：今、カフェとかレストランは別枠になっていて、ホテルとか、コンベンションの施設が入ってくればまた状況は変わってくるかもしれないのですが、これがなくなってしまっただけの枠だけ見ると、すごく普通の博物館で、あれ？という感じがします。

市の美術館でデザイナーのグループが展示会をやったときに、「しずおかのカタチ展」というのをフロアでやらせてもらったことがあるのです。そのときに静岡のお菓子をデザインしたのですが、そこにあるミュージアムショップと連携して、展示会の期間だけそのカフェでそのお菓子が食べられるようにしたら結構評判が良くて、そのお菓子は葵プレミアムになるほど成長しました。

そのような流れがあって、ここにいつも新しい仕掛けがあって、それが成長して何かになっていくものが見せられないといけないと思います。過去のものを見せるだけの博物館だったら過去につくっていけばいいわけです。これからつくる博物館の価値の創造をどこでやるのかが見えにくくなっているんで、イベントとか新しいことを展開していくときにカフェとかミュージアムショップは結構使えるツールになるので、それを手放してしまうリスクはすごく大きいと思います。

周辺にいいレストランもたくさんありますし、ホテルとかが入ってくればそちらのレストランとやりとりすることもできるかもしれないので、博物館の中にレストランまでは要らないと思うのですが、博物館の企画の範疇で動かせる食べられる施設と、物を入れる施設は中に入れておくべきだと私は思います。

○委員長：いろいろな発想が出てまいりましたので、にぎわいになりそうだなという感じがしました。これは非常に大事なことで、最初に問題が投げ掛けられたときに、いかに集客するかというのが一番最初に出てきた話でした。そういう意味でいえば、核となる博物館の施設そのものの検討と同時に、それを最大限に活かす、あるいはさらに盛り上げるためにどうしたらいいかが今、問われているのだらうと思います。

いろいろなアイデアが出てきたときに、それが民業圧迫にならないかどうかというのは、

いかがでしょうか。

○熱川：先ほどホテルの話をしたのですが、シティーホテルについては、結婚式とかコンベンションの取り合いみたいになっているものですから、駅前で結構いっぱいみたいで、ここら辺はいけないのかなというところがあります。ただ、静岡の場合、ビジネスホテルは 80% ぐらいの稼働率で、かなり高稼働率なのです。なおかつ、外国人が来ても受け入れられないぐらいの感じで、インバウンドを増やしていこうとしているにもかかわらず、泊まってもらえないところがないという意味では、まだまだ開発していく余地があるのではないかと思います。

○委員長：つまり、競合以前に静岡に欠けているものがあるので、それをここでもある程度充足できるようなアイデアがあったら面白いなということだと思います。

○櫻井：集客に焦点が行っている色々なアイデアが出ていますのだけれども、博物館はどうなってしまったのだろうと考えていました。結局、博物館では集客できないことなのですよね。でも、水を差すようで申し訳ないのだけれど、博物館とか美術館というのは、静かに見たいのです。だから、あまり大勢の中になくてもいいなという感じもあって、集客集客と言うけれど、どうしてそこまで集客を考えなければいけないのかと、皆さんの話を聞きながら感じています。

そういう意味では、ビジターセンターをいかに魅力的にするかということだと思うのです。この前までは、寺子屋みたいなものとか、家康お手植えミカンを使ったスイーツを出すお店とか、魅力的なものがずいぶんあったのですけれども、それがみんななくなってしまったような気がします。

博物館に関係した講座みたいなものは、あっちへ行け、こっちへ行けではなくて、やっぱりその近くで聞きたいです。関連のものをやるのは周辺の施設でいいのですけれど、メインの講座はここで聞きたいので、講座を聴ける施設がほしいと思います。

ここで静岡のお茶を出すような話も前にあったと思うのですけれども、そういうスペースもほしいので、そうすると給湯室とか、それにかかわるインストラクターさんがいる場所なども必要になってくると思います。それは細かいことですが、何をするかによって変わってくると思うのですけれども、集客の話が余りに大きすぎて付いて行けない感じがしました。

○熱川：僕が言っていたのは集客の話ではなくて、今まで議論があった食べるところがほしいよねとか、そういうところが枠外に出されてしまっているの、たぶん静岡市で出す

つもりはないということです。そのときの知恵として話をさせていただきました。

イベントという言い方をしましたけれども、いろいろな人が先生になって、講座も含めていろいろなことをここでやったほうがいいのではないかとということです。

○今村:今の熱川委員のお話ともかかわるのですけれども、発想の自由さはすごく大事で、今日の話も刺激的だったのですが、一方で足元的なところも大事で、景観の問題で高層階のものを建てるとする、駿府城の横に立てるわけで、県の施設等が周辺に建っていますので、その辺りの兼ね合いを考えておく必要があると思います。ゆくゆくは県との調整が必要になると思います。

もしこれで高層階の建物が建ったとしたら、将来的に駿府城を国指定の史跡とかに持つていくときに、それが障害になってはまずいと思うのです。その辺りの問題も、一方ではにらみながら考えて行く必要があるのではないかと思います。建物を建てたらそれが残るわけです。それは市の品格ともかかわってくる問題だと思います。そこは考慮に入れたほうがいいと思いました。

○櫻井:私は県庁前でバスを降りるのですけれども、まず目に付くのが石垣です。静岡市のあの石垣は非常に立派なもので、誇っていいものだと思います。その石垣の中にできる感じになるので、景観は大事にしていきたいと思います。

○委員長:景観という非常に重要な問題が出されました。これは常に意識しておかなければいけないことだと思います。

○谷:このゾーンの話をするのであれば、先ほどから前提条件のようにいわれている 50 万人はどなたが決めたのか知りませんが、僕は静岡市では無理だと思います。こんなことを考えていて、それが前提でいろいろやろうというのは、今 5000 平方メートルとおっしゃいましたが、これぐらいの施設で 50 万人集まるというのは、考え方が間違っていると思います。

たぶん、50 万人をどういうふうにカウントするかによるのですけれども、この部分が単なる交流施設という漠然としたものではなくて、無料で多少集客力のあるものをつくれれば、集まってくるわけです。僕はそういうふうに考えたらいいと思います。

今は、エントランスホールとかでただただ空間をつくっています。博物館エリアに入る人を 50 万人とはまさか考えておられないと思うのですが、今の 50 万人はどうカウントしておられるのですか。

私が絡んだ「さかい利昌の杜」は、無料ゾーンがかなり大きくて、その横にお茶室があ

ります。博物館もあるのですけれども、たぶん博物館に入るのは 20% ぐらいだと思うのですが、無料ゾーンにやってくる観光客が多いのです。隣にスターバックスと、梅の花というお豆腐関係の店があります。そこが、無料ゾーンに集まってくる人たちで潤っています。

つくる前に私は、たぶんスターバックスとか、そちらのほうが潤って、博物館にはあまり来ないのではないかと思ったのです。堺観光のビジターセンターだという位置付けをしたので、そこにまず集まってくるのです。博物館は見ないけれども、お茶室に行って立礼でお茶を飲むとか、スターバックスでコーヒーを飲む人が結構多くて、梅の花は、周辺で一番の収益率になったらしいです。これはいい例になるか僕は分からないのだけれど、そういう目で見たとときに、今の無料ゾーンはすごくプアーな感じで、魅力に乏しいと思います。

一方で、この博物館は、せっかくこれだけの収蔵庫があるのだから、博物館としてしっかりとしたものをつくっておかないといけません。今日は博物館の中身が議論されていないので、櫻井委員がおっしゃったように、これが魅力的かどうかの判断がつかないのですけれども、常設展示室の 1300 平方メートルはとてつもない広さです。この中を展示で埋めていこうと思うと、相当な収蔵資料がないとできません。私が 2000 平方メートルと言ったのは、6000 平方メートルの中の 2000、2000、2000 というだけの話で、2000 平方メートルの展示室が絶対に必要だとは言っていないのだけれど、その 2000 平方メートルが独り歩きして、一方では収蔵庫だけが縮小されたような、そちらにとってのいいところ取りで、僕にとっては悪いところ取りされたとしか思えないような面積になっています。

1300 平方メートルというのは、事務局のお手伝いをされている方に展示の関係の方がおられると思うので、そういう人が、例えば 2,000 平方メートルの博物館をつくって失敗した例はたくさんあると思うのですが、そういう話をあまりしておられないのではないかと思います。そういうことも踏まえて、このへんの面積を見直しておいたほうがいいと思います。1300 平方メートルを常設展示で何かつくろうと思ったら、ものすごく大変です。

そこは、もう少し視点を変えて、常設展示がエントランスホールににじみ出るようにしたほうがいいと思います。

この図だけ見ると、きれいに整理したように見えるのですが、その中でのめりはりができていなくて、あれもこれもという総花的になっています。もう一回めりはりを付けて、だけど収蔵のほうにしわ寄せが行かないようにしないと、20 年、30 年、あるいは 50 年使える博物館にならないです。できた段階で収蔵が満杯だと、博物館としては失格です。そ

のへんもいろいろ考えると、結局、展示エリアのコンパクト化も大事だと思います。

○森田：基本構想の段階で、何階建てより高くできないという問題が出たのと、収蔵庫をたくさんつくるのは無理だから、最初から外に準備しましょうというのが前提でここにつくる話になったと思います。収蔵庫が少ないのは、外に準備してくれるだろうという前提で聞いていたものですから、今ある施設を検討したうえで足りない分はつくっていただくことでいいのですか。

また、たくさんの方に来ていただくのは、今熱い歴史家の方だけではなくて、普通の観光客にも歴史に興味を持ってもらえるような施設にしたいということだったと思います。ボランティアとかで活動していただく方は熱い歴史活動家だと思うのですが、そうではない人たちは、無料ゾーンに来て歴史に興味を持ってもらわなければいけないわけです。

企画展示室を常に動かすために市民の展示会をそこで開催することになると、その動線をいかにつなげるか、どういう連携になるのかが一番重要です。ここが文化財ゾーンです、ここがビジターゾーンですというのではなく、つなぎ目のところの企画が、この事業では一番重要なのではないかと思います。それが、この場では議論できない感じなので、今までの検討を含めて、そこを整理していただけるとありがたいと思います。

○望月：展示エリアの話に入ってきたものですから、今日は中学校のものを持って来たのですが、静岡市の小中学校ではこういう資料をつくっています。どの地域でもあると思いますが、「わがまち静岡」というものです。これは中学校版ですが、小学校版もあります。小学校版は、商店街とか消防署の勉強で、ある面で企業的なものになっていますが、中学校は地理・歴史・公民の分野でつくられています。これを地域学習として子どもたちは勉強していきます。

これは展示エリアの自分のイメージなのですが、小中学生が静岡の地に生まれ育って暮らしている、将来的に静岡の地に暮らして行ってほしいという願いがあるわけです。そうした中で、自分たちの祖先がこの静岡の地の同じ場所でどういう生活を送っていたのかをきっちり学べる展示にしてほしいなという思いがあります。

資料の歴史のところを見ていくと、いろいろな資料が載っていたり、どこにどんなものが展示してあるかが載っていて、興味のある子は出掛けて行くのです。登呂遺跡へはほとんど 100%の子どもたちが行きます。でも、埋蔵文化センターはとても不便な所であって行きにくいです。文化財資料館は浅間神社にあるので、小さいながらも興味のある子は行

きます。この地域に近い所へは行けるのですが、まとまって見られる施設が静岡市にはないのが現状だと思います。違う時代だけれども、同じ場所にいた人たちがどのように暮らしていたのか、子どもたちに静岡市に生まれたアイデンティティを伝えられる展示にしてください。

ただ展示を見るだけだと、観光客と同じです。子どもには、そこで生きた人たちがどのような苦勞をしていたか、どういう考え方で暮らしていたかを伝えてくれる語り部がいるとすごく助かります。先ほどから出ている市民活動家の方々がそれを上手に伝えてくれるようになると、この展示スペース、市民交流エリアのボランティアの市民活動室が一体になっていると非常に嬉しいです。

小学生はクイズが好きなのです。学んできたことをクイズでおさらいすると、とても嬉しいのです。そういう振り返りを授業みたいにやっていただけると、知識の中に落とし込んでいけるのです。ですから、映像スペースをつくったり、クイズができるような講座室をつくっていただくと、小中学生が一体的ないい勉強ができるのかなと感じます。

○委員長：博物館の本質のところに戻ってきて、その周辺で、どういうかたちでお客さんをお呼びかということとうまく絡まりながら話が展開していけば、さらに立体的な構想になるのではないかと思います。今まで個別のテーマでお話をいただきましたが、今のご発言も含めまして、特にこういうものがあつたらいいなとか、こういう発想もあるよと、全体を通じた意見がありましたら、お願いします。

○熱川：ちょっと確認しておきたいのですが、静岡音楽館 AOI をつくったときは、この段階で全国公募して学芸員を呼んで、館長も決めて、どんなかたちのものをやっていたのか、どういうコンセプトにするのか、やっていたと思います。そろそろその作業に入らないと、間に合わないと思うのですが、どういうお考えなのでしょうか。

先ほどの谷委員の話なのですが、無料ゾーンをどう魅力的なものにするかは大事で、しょっちゅうコンベンションをやって、エクスカージョンをやるときに、これができると必ずここを選びます。今の東御門巽櫓ではちょっと弱いのです。これとセットだったら、自信を持って全国のコンベンションに集まった人を案内します。そのときに無料ゾーンが面白くないと恥ずかしいです。だから、楽しめるようなものをぜひつくってもらいたいと思います。

○委員長：この委員会の一番最初に、まずビジターセンターの話がありました。だいぶそれに引きずられている部分もあると思いますが、先ほどからお話のとおり、博物館の本質

と、周辺の問題をどう絡めるかは極めて大きな問題として、改めて認識されてきたと思います。

さらにもう一つ忘れてならないのは、周辺と一体となったかたちでの施設の活かし方です。つまり、敷地の隣に何かをつくるということではなくて、静岡駅からここに至るまでの道筋、あるいは商店街とのつながり、そうした意味における視野が必要ではないかと思います。そこら辺も含めまして、何かアイデアがありましたら、ご意見をいただければと思います。

○松川：長崎に行きましたら、プラチナパスポートというものがありました。それは、路面電車が乗り降り自由で、5 つの施設に行けるのです。プラチナパスポートをもらうと、旅行者にとってはありがたいです。それで、長崎の中の 5 つの施設に必ず行くわけです。

山梨のほうは、山梨に泊まると美術館とか博物館を割り引くのです。山梨には、考古博物館、美術館、博物館もあれば、文学館もあるのです。すぐできることとしては、そういうこともあるかと思います。

先ほどから、自分として違和感があるのは、集客の力がなければ失敗なのかというところですが、自分としては、望月委員が言ったように、子どもたち、あるいは市民が静岡はすごいねという驚きと発見があって、郷土に目を向けることが一番だと思っています。例えば、山梨県立文学館はすごいです。絶対採算は取れません。しかし、ものすごいです。考古博物館もすごいです。

そうしたときに、あんなものを建ててと言うのか、それとも、山梨はあんな文学館を持っていてすごいと思うのかです。僕は、山梨ってすごいと思うのです。決して、こんなものを建ててとは思いません。

だから、まさに集客力がなければその博物館は失敗だという考え方は、自分としては受け入れることはできないとだけ言わせていただきます。

○谷：これはそもそも博物館です。だから、その原点に戻ると、もともと博物館は社会教育施設で、子どもに歴史を教える、実物教育をどうするかというところから始まっていると思います。

だけど、今までの話は、どちらかと言えば、集客、イベント性みたいなものが中心になっていて、そもそもところを忘れていてはないかと思います。子どもから、最近は高齢者も博物館に行くようになって、裾野が広がっています。それがたぶん歴史好きの人だと思います。最近は、大阪であれば外国人なども加わってきて、博物館の裾野がさらに広

がっています。

そもそもの話をすると、博物館とビジターセンターをどのように上手に使っていくかが今回の課題でした。ここで言うと、オレンジ色で囲った所をどのように一体化して相互の環境をつくるかというところが大事だと思います。この案は、そこが全然考えられていません。

さらに言いますと、堺の例でうまく行ったのは、無料ゾーンに市民など相当な数の人がやってくることです。それは、例えばトイレタイムを含めてです。それも含めて 50 万人カウントするのだったら行けるかなと思います。それぐらいの気持ちで事務局がやらないと、50 万人県内からということで尻をたたいていろいろイベントをやれという方向で行くと、間違うと思います。

ただ、一方では、常設展示が魅力的でないと、つまり静岡の市立博物館に行って何をしようというところがはっきりしていないと、博物館へは行かないです。特に外の人には行きません。小学校などでは歴史を学ぼうとって来るのですが、それが何なのかが絞り切れていなくて、今のところは徳川家康公という話になっていますけれども、徳川家康公では駄目です。つまり、家康公の何を持っていくかが大事なのです。前日も言ったと思います。物がなくて博物館ではなくて、情報とか、映像とか、パネルでごまかしているのだけれども、それは全然駄目です。だから、物、あるいは立体で何ができるかです。本物があるに越したことはないけれども、そうでなくてもいいと思います。民族学博物館はまさにそうですから、それはそれでいいと思うのですが、その提案をはっきりしないと駄目でしょう。

僕は、事務局で恐らく展示業者の方が関係していると思うのですが、展示業者の方が今まで博物館をいろいろつくってきて、何が失敗して、何が成功したか、もっと本音を出さないと駄目だと思います。そういう議論をすると、物、展示空間が充実しているところが成功しているのです。

そういうところをもっと議論して、常設展のところで、あそこに行ったらこんなものが見られますよというキャッチフレーズをつくらなければいけないです。

それからもう一つは、無料ゾーンにキャッチフレーズのある、インパクトのある展示があることです。それで初めてエントランスホールが、博物館のエントランスホールになるのです。このままだったら、そのへんのホールのエントランスと変わらないわけです。それは、決して博物館をアドバンスできていないわけです。

公費を投入して無料にするのかという議論はあるかもしれないけれども、逆です。公費を投入してこそ無料ゾーンにちゃんとしたものをつくって、有料ゾーンに引っ張って行くという発想でやらないといけません。お金をかけた所は有料にして、そうでない所は無料などという、無料ゾーンがものすごくプアーなものになります。そのところを、事務局のほうでちゃんと整理して、50 万人というのをあちこちで言わないようにしてください。正直に言いますが、大本营発表というようなことで、絶対無理だと思います。

それが後から付いてくるのならいいわけです。だけど、それを目標にしてしまうと、最初の年にずっこけたり、最初の年はなんとかそれに近いものができても、間違いなく 2 年目、3 年目は必ず坂道を転げ落ちます。そのときに、財政当局などの方は覚えていますから、何年たっても何十万人という約束をしたのではないかという話をされます。

前回、前々回の議論ではみんなが好きなことを言っているのですが、それをみんな入れたら、面白みもなく、おかしくなってしまう典型例だと思います。厳しいことを言って申し訳ありません。

○委員長：既に新国立競技場であしき例がございますので、そうならないようにしたいと思うのですが、今日はいろいろなかたちで議論が元に戻ったというか、皆さんが本質論にさかのぼってきて、一体何が必要なのだろうかということを真剣に考えてくださったと思います。そうした流れの中から、これだけは、この博物館を活かすうえで絶対に必要だということが合意できれば、面積が例えば 500 平方メートル増えても、市は、全体の投資としてそれをどう捉えるかという位置付けで話が進むと思います。本質からずれないところで、今後の議論を進めていただければと思います。

先ほど熱川委員から学芸員という話がありました。その問題も含めまして、市のほうからもう 1 枚プリントが出ております。今日の主たる議題につきましては、まとめにはなりませんでしたが、先ほどちょっとお話をしましたように、いろいろな要望をどう展開していくか、今後の課題が示されたということで、区切りを付けておきます。

議事はここまでになるのですが、報告ということで、市からもう 1 枚のプリントについての説明をお願いしたいと思います。

○事務局：先ほど来、谷委員のほうから 50 万人の話をしていただいたので、50 万人ぐらいが集まれるようなビジターセンター機能を皆さんに考えていただいて、結果的にどのぐらいの人数が集められるのか、委員会としての考えを導いていただきたいと思います。考えているだけで、50 万人を前提としていないというところだけ、ご確認をお願いいたします。

この施設だけではなくて、駿府城エリア全体で 50 万人になるようなビジターセンター機能です。

そうした中で、資料 3 で、運営形態につきましてご説明させていただきます。

これは、一昨年度までの建設検討委員会による報告におきましても言及されているものですが、現時点で、管理運営方式について市の考え方をまとめたものであります。今後さらに詰めていく必要がありますが、ここで報告させていただきたいと考えております。

(以下、資料 3 を説明。)

○委員長：今日決定するという話ではなくて、こんなことが考えられるというのが今回の説明だと思います。忌憚のないご意見をお聞かせください。

○熱川：指定管理制度は、人件費を含めてコストを低く下げられるというのがあるけれども、今の静岡市の指定管理制度のやり方を見てみると、とても信用できなくて危なくてしょうがないです。指定管理者がそもそも最初のコンセプトを分かっているのかなと感じます。これだけの金額で、これだけやってほしいということで契約を結ぶけれども、その次の契約のときに、中身が分かってしまうので、コストを切ってきます。そのようなやり方をするのであれば、教育施設としての歴史博物館が成り立つわけがありません。

そういった面で、最初のころは約束していても、人が代わると約束を平気でたがえてしまいます。今の外郭団体がやっている施設も、コストカットしてきて、人件費まで手を付けていますので、官制ワーキングプアみたいな感じで、ブラック企業のような業者がいます。そういうふうにならざるを得ないところがあるので、やってくれる人たちも子育てをしなくてはいけないし、家族を守っていかなければならないので、それがちゃんと担保される管理のシステムを考えてほしいと思います。

○松川：ちょうど身近で、藤枝の博物館の例がまさにこれです。指定管理者で始めて、手を上げるものがないくて、藤枝の博物館が中ぶらりんになってしまいました。それで、今はまた公営でやっています。そもそも博物館自体が、民営で利益が出てくるかというところからいって、まさに藤枝の二の舞になってしまわないかと思います。

○杉澤：静鉄グループでも、指定管理者は幾つかやらせていただいたものと、今させてもらっているものもありますが、民間の業者からすると、指定管理者は非常に魅力が薄い状況で、なかなか手が挙げづらくて、結果、なんとか頼みますみたいな話になってしまうこともあります。

こういったものと、ノウハウの蓄積とか、長い目で見るところも必要なのかなと思うと、指定管理者というのは違和感があります。

○今村：今、出ている意見とかかわるのですけれども、この歴史博物館は、郷土愛、郷土のアイデンティティを育てていく役割を持つべきだと思います。郷土愛というと、今はすごくきな臭く見られるかもしれませんが、僕は大事だと思っています。この静岡に愛着を持ってくれる方がここで学芸員としてやっていただいたほうが、私は絶対にいいと思います。そうすると、難しいかもしれないですけど、長く勤められるかたちが良いと思います。

指定管理に関しては、任期付きということで不安定さがつきまといまいます。そうすると、ほかの博物館と一緒にではないかということで、募集の際に手を挙げないことになりまいますので、指定管理者制度に関しては、私も疑問を持っています。

○谷：うちのところは指定管理ですけども、主には外郭団体が経営をしています。

こういう委員会をやると、指定管理に賛成の人はたぶんいないのです。だけど、この委員会の結論を覆して、指定管理にしてしまうのです。ここで「指定管理は絶対に駄目です」と言ったら、事務局は放棄してくれるのですか。なかなかしてくれません。本音は、たぶん指定管理にしたいのだらうと思います。それは財務当局から言われているわけです。

指定管理は、博物館では問題があります。あまりうかつなことは言えないのですけれども、例えば駐輪場とかプールとかで、プールは安全の問題があって、そういう事故が大阪で起こりましたから、簡単に指定管理にして単にコストダウンしたらいいというわけではありません。

指定管理はいろいろ問題があります。特に博物館は、先ほど皆さんがおっしゃったように、継続性とか学術性という点で問題があります。前にも言ったかもしれませんが、指定管理にすると一番の削りしろは人件費です。指定管理の博物館は、全部とは言いませんけれども、大体月に 20 万円です。1 年更新で、3 年とか 5 年たって指定管理が終わったら、場合によってはクビになります。

私の弟子もあるところで指定管理の博物館にいまして、来年の 4 月以降はその指定管理者へ応募しなかったのです。その子は、来年の 3 月でクビになるわけです。学芸員はそういうふうに使って捨てます。

20 万円でしたら、大学を卒業したすぐならいいけれど、何年もたったときに、毎年 20 万円ボーナスなし、退職金はなしで、例えば、市の職員の方がそこに行くと思うかといっ

たら、たぶん誰も思いません。だけど、市の職員はそういうのを知っていながら、指定管理に出してしまうのです。そこがものすごく大きな問題で、体を張って指定管理を阻止する気構えをお持ちなのか、僕は逆に事務局の方に聞きたいのです。

一方で指定管理になると有利なところが民間のノウハウだと書いてありますけれども、民間のノウハウとは何なのか、僕は聞きたいのです。例えば、この民営の 2 番の 2 のメリットのところ、「運営に関する民間の専門的ノウハウを持ったスタッフ配置が期待できる」と書いてあります。関係者の方でもしお答えできる方がおられたら、一体これは何なのか、答えてほしいです。

そんなに大して持っていないのですが予算執行のときに、役所の直営だと必ず入札しろとか、公共としてのコンプライアンスがあって、できないことがいっぱいあるのです。例えば、うちの博物館でも、桂米朝さん呼びたいけれど、公共だと 1 回 3 万円でもとても呼べません。だけど、民営にすると呼べるのです。そういうところのハードルは確かにあるのです。それはバーターで、どちらがいいかという話とは別です。

民間が絡んでいると、そういうところにノウハウがあると思います。今回の場合は、エントランスホールがかなり大きな比率を占めるときに、公共だけで運営していると、著名人を呼ぶときに、教育委員会の講演で 3 万円とか 5 万円と決められてしまったら、もう誰も来てくれません。そういう点で、大きな予算をばつと使えないところは、直営の問題点だと思います。

経営の問題でいくと、どなたかがおっしゃいましたけれども、最終的にもうかっている博物館はほとんどありません。事業としては縮小していきます。それなりに業績を上げたら、4 年後、5 年後の指定管理のときに、その分をはねて、それより下の額で受託しろと行政は言うてくるのです。こんな身勝手な話はないのですけれど、必ずそうやってきます。それが先ほどおっしゃった答えだと思うのですけれども、そうしたらますます質が低下してきます。とても 50 万人どころの話ではなくて、縮小再生産になっていくと思います。そのへんをよく勘案する必要があります。

○委員長：いろいろご意見はありますが、私は 1 つ別な視点から言います。50 億円ないし 60 億円のお金をかけて新しくつくるわけです。そして、一番大事な核になる部分を外に出すということは、果たして市民の感情として許されるかどうかという問題です。つまり、正規の学芸員をどういう方法で雇うかは別として、理念からいえば、雇うことによって、仮にコストが 1000 万円、2000 万円上がったにしても、トータルの投資額に対しては微々

たるものです。しかも、静岡市の第三次総合計画の歴史文化都市の建設の一番目玉の中の根っこになるのが、この施設なのです。

そうなりますと、市としては、逆にいえば、無理やり相当なお金をつぎこんで、50 億円、60 億円の投資を回収するというような発想をしていただかないと、とてもこれは実のあるものにはならないのではないかと、ものすごく強く感じます。

一部に伺いますと、市の人事管理の問題や、いろいろな制約はあるようです。しかし、これは来年すぐやれということではなくて、今言いましたような静岡市の長期的な展望の中にこれを位置付けたときに、何が一番いいのかという発想をぜひしていただいて、規則がなければそれに合う規則をつくるまで踏み込んでいただかないと、三次総の実現はおぼつかないと思います。

たまたま委員長という立場で言いたいことを言わせていただきますが、ぜひご検討をお願いしたいと思います。これは、たぶん委員の皆さん方のお考えと共通している部分があると思います。

○谷：先ほどの最後の案のご説明のときに、直営の学芸員と、指定管理の学芸員とおっしゃいました。直営の学芸員と、指定管理の学芸員は全く給与体系が違いますので、一緒に仕事ができるのでしょうか。そういう感情は必ずありますから、問題だと思います。

ただ、今の学芸員教育で出てくる学芸員は、結構堅すぎて、今議論をしているような集客などに対応できるのでしょうか。学芸員なら誰でもいいというわけではないと思います。

それが一番難しいところで、大学で学芸員教育を受けているときには、保存とかいう話は結構やるのですけれども、活用というところはあまり教えません。原理主義者がやって来ますとすごく難しい運営になるので、かえって足を引っ張ることがあります。私もいろいろ苦労しました。

それは、ちゃんとした人を見るということだと思います。そうしないと、その人が 30 年、40 年いるわけですから、その人の個性で博物館の方向が変わってしまうこともあります。そのところは、面接などでよくご覧になって、単にペーパー試験ではなくて、いろいろ実技をやらせてみるとか、例えば、案内をさせてみて本当にできるのかとか、その人の個性みたいなものをよくご覧になればいいと思います。人次第です。

それから、館長にちゃんとした人を選ぶことです。ちゃんとした人を選べば、館長からずっと学芸員を教育できます。そこから選ぶのがすごくいいと思いますので、ぜひ、来年といわず、この秋ぐらいからでも、つばをつけていくことが大事だと思います。

○委員長:とにかくいいものをつくるというのが、お互いの共通の発想でございますので、その方向に向かって、ぜひ頑張ってくださいと思います。特に人事については、市の上層部には、いろいろな意味でのトラウマもあるようでございますが、そうしたものを払拭して、谷委員のお話も十分加味したうえで、本当にここに骨を埋めてもいいというような人間が来られるような枠組みをしっかりとつくっていただければ、本当にいいものができるのではないかと思います。

では、時間になりましたので、本日の委員会はここまでということで、事務局にお返しいたします。

○司会:それでは、以上をもちまして、第 3 回静岡市歴史文化施設建設検討委員会を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(終了)